

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 20 日現在

機関番号：32612

研究種目：新学術領域研究

研究期間：2008～2012

課題番号：20121005

研究課題名（和文） サンゴ礁 - 人間共生系の景観史

研究課題名（英文） Landscape history of interactive relations between coral reef and human societies.

研究代表者

山口 徹 (YAMAGUCHI TORU)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：90306887

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：サンゴ礁 ジオアーケオロジー 歴史生態学 歴史人類学 景観資源の活用

1. 研究計画の概要

景観は多義的な概念だが、今みる景観を人間の営為と自然の営みの絡み合いが生み出した歴史的産物として位置付ける。そのためには人文社会科学と自然科学を接続し、人間と自然の相互関係の複雑な連鎖をテーマとする歴史生態学的視点が役立つ。本研究では、その学際的な枠組みを基盤としながら、サンゴ礁 - 人間系の動的な関係を通時的に把握することを目的とする。そのために、歴史とフィールドワークを共通項とするジオアーケオロジー、動物考古学、形質人類学、歴史人類学、文化人類学の諸学が連携しながら、オセアニアの環礁と八重山諸島石垣島を協働のためのフィールドと設定し、人為的ストレス（人間社会 サンゴ礁）とローカルな生態系サービス（サンゴ礁 人間社会）の2つのテーマに沿って、長期・短期のタイムスケールで4トピック（進捗状況参照）の研究をすすめる。さらに、各成果を総合することによって、「絡み合う人と自然の地域史」の描出をおこなう。

2. 研究の進捗状況

既存調査データにもとづいたオセアニア環礁研究の成果公表（研究成果参照）を進めるとともに、石垣島での現地調査を4回おこなった。そのデータにもとづいて、以下3トピックについて新たな所見が得られ、その成果の現地還元をすすめた。

(1) 長期的環境史：完新世中期以降に特に焦点をあて、石垣島名蔵地区において陸域と海域のはざまにある地形を対象にボーリング調査を行った。その結果、ハマサンゴが群集する浅海からマングローブ湿地への変化が過去に生じたことが明らかとなった。その要

因として、完新世後期以降の海面低下と、内陸からの土砂流出が近世期に急増したことが考えられる。後者は特に、琉球王府の支配によって強化された森林開発の時期に対応する。

(2) 近現代の農業史：明治期から昭和期には、さまざまな移民が石垣島に居をかまえ、その多様な利害が交差しながら陸域・海域の開発が進められてきた。平成に入ると、農業の機械化によって内陸斜面にまで可耕地が拡大した。これにともなって、サンゴ礁に大きなストレスとなる赤土流失が短期間に桁違いに増大するとともに、人口配置の不均衡や耕地分布の偏在性によって局所的に進行したと考えられる。

(3) サンゴ礁資源の相対的価値：本土復帰後の1970年代までは漁場としてサンゴ礁が利用されていたばかりでなく、サンゴそのものが漆喰や壁石といった建材に利用され、形状や種類ごとにローカルな呼称があり、目的に応じて使い分けられていた。1970年代後半以降、建材の移入等によって漆喰需要が急減してしまい、従事者の高齢化とともに伝統的生態知識(TEK)が急速に喪失しつつある。

(4) アクティブアウトリーチ：一般市民対象に「絡み合う人と自然の歴史学のために」と題した講演会を石垣島にて3回企画した。また、石垣市に拠点を置くエコツアー事業者を対象に名蔵巡検を実施した。

3. 現在までの達成度

区分：おおむね順調に進展している。

理由：人文科学のフィールドワークは通常、現地社会との関係構築に時間を要するが、考古学調査の現地カウンターパートである石垣市教育委員会を通して、各分野が必要とす

る行政部局との連携がきわめて円滑にすすんだ。また、一般島民を対象とした講演会を実施したことによって来場者との対話機会が生まれ、文化人類学や歴史人類学の聴取調査に必要なインフォーマントとの関係構築が短時間に進展した。

4. 今後の研究の推進方策

歴史学とフィールドワークを共通項とする本研究班は、人間居住史と自然史(地史)の両面を扱ってきたジオアーケオロジーを中心に、動物考古学、形質人類学、歴史人類学、文化人類学から構成される。さらに、情報と議論を共有してきた計量経済学の公募研究者を加えて、代表者・研究分担者4名、連携研究者2名、研究協力者2名で研究班を組織する。平成23年度は引き続き、石垣島のフィールドワークを調査活動の中心にする。ジオアーケオロジー・動物考古学・形質人類学は、長期的環境史のためのボーリング調査や試料の解析からえた知見をもとに、人間居住史にかかわる発掘調査を予定する。形質人類学は歴史人類学・文化人類学と連携し、現島民の食生活と骨密度にかかわる情報収集をすすめる。歴史人類学・文化人類学は、明治期以降の人口動態や人口配置の変遷について文献史料・統計資料の解析をすすめる。出自や立場を異にする多様な主体間の社会関係について歴史的視点から聴取調査をおこなう。また、近代以降に急速に進んだ河川改修や農地改良、農業用給排水設備の整備について調査する。平成24年度は、フィールドインフォマティクスを密に実施することによって、景観史の枠組みに各研究成果を組み込み、他研究班と連携しながら「絡み合う人と自然の地域史」を完成する。ホーリスティックな地域史の活用可能性を考えるために、島嶼経済における観光産業の位置づけとその歴史的展開、ならびに石垣島におけるエコツーリズムの現状把握と歴史的展開を補足的な研究トピックとする。

5. 代表的な研究成果

〔雑誌論文〕(計23件)

- (1) 棚橋訓 2010「地図と権力—マーシャル諸島ローラ島の地図作製をめぐる権力作用の一考察」『知の大洋へ、大洋の知へ—アジア経済研究所オセアニア研究シリーズ』彩流社 pp.167-202. (査読有)
- (2) 深山直子・石森大知 2010「『沈む』島の現在—ツバル・フナフチ環礁における居住を巡る一考察—」『史学』79(3):57-75 (査読有)
- (3) Yamaguchi, T., H. Kayanne & H. Yamano. 2009. Archaeological investigation of the landscape history of an Oceanic atoll: Majuro, Marshall Islands. *Pacific Science* 63(4): 537-565. (査読有)

(4) 山口徹 2009「『高い島』と『低い島』: 歴史生態学の視点から」日本オセアニア学会(編)『オセアニア学』京都大学学術出版会, pp.117-131. (査読有)

(5) 吉田俊爾 2008「クック諸島出土ポリネシア人の人類学的研究」近森正(編)『サンゴ礁の景観史』慶應義塾大学出版会 pp.387-404. (査読無)

〔学会発表〕(計19件)

(1) 山口徹, 他7名「石垣島名蔵地区の完新世環境史研究 - サンゴの浅海からマングローブ湿地へ」日本サンゴ礁学会第13回大会, 2010/12/4, つくばカピオ

(2) 深山直子, 棚橋訓「石垣島・八重山人(やえやまびと)とサンゴ礁の『伝統的』利用 - ある根本問題をめぐる省察 - 」日本サンゴ礁学会第13回大会, 2010/12/3, つくばカピオ

(3) 下田健太郎, 山口徹「石垣島エコツーリズムの調査報告」日本サンゴ礁学会第13回大会, 2010/12/3, つくばカピオ

(4) Yamaguchi, T., 他2名 “Landscape history of a ‘drowning island’: prehistoric human settlement and geomorphologic formation of Funafuti Atoll, Tuvalu.” The 2nd Asia Pacific Coral Reef Symposium, 2010/6/23, Phuket, Thailand.

(5) Yoshida, S., 他2名 “Coral reef resources use considered from human bone of prehistory of Pukapuka and Majuro Atoll.” The 2nd Asia Pacific Coral Reef Symposium, 2010/6/23, Phuket, Thailand.

〔図書〕(計1件)

(1) 棚橋訓, 他3名責任編集, 丸善『文化人類学事典』2009, 864p.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

(1) 研究成果公開「絡み合う人と自然の歴史学のために(第2回)」山口徹, 吉田俊爾, 石垣市教育委員会後援, 石垣市名蔵公民館 2010/8/9, 石垣市立図書館 2010/8/20

(2) 新聞報道「アンパルの成り立ち: 山口教授が成果発表」八重山日報 2010/8/21

(3) webpage: オセアニア環礁の景観史を研究、絡み合う人と自然の歴史を紡ぎだす (<http://flet.keio.ac.jp/res/report-yamaguchi.html>)